

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長 殿

授業担当者

所属/職名: 国際島嶼教育研究センター・准教

氏名: 山本宗立

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成25年9月16日～9月23日
<p>〔研修の成果〕</p> <p>グアム島ではイナハラン・チャモロ文化村を訪れて、グアムの先住民であるチャモロの文化を学んだ。グアム島の南部を半周し、グアムの自然(植物・動物・地形など)や歴史(特に第二次世界大戦時の遺跡や博物館において)を学んだ。大学間交流協定のあるグアム大学を訪れ、教育学部のYukiko Inoue先生にグアムおよびミクロネシアにおける教育の現状・問題点・展望についてご講義いただき、学生と活発な議論をおこなっていただいた。Yukiko先生からは後日「Many students from Japan visit me but your four students are best」という便りをいただいた。グアム大学の附属水産試験場において最先端の研究(珊瑚や海藻類の繁殖等)を見学した。ミクロネシア連邦チューク州ウェノ島では州の観光局を訪れ、Mason Fritz局長にチュークの文化や歴史、観光についてご講義いただいた。地元の市場を訪れて地場産の作物や魚介類を学ぶとともに、近代的な設備を持つスーパーマーケットでは多種多様な輸入食品が多量に販売されていることを知り、MIRAB経済の構造を理解した。チューク女性協議会(Chuuk Women's Council)を訪れて女性団体の活動を学び、当協議会へ赴任中のJICAシニア海外ボランティア・角田みゆきさんに性感染症や環境問題についてご講義いただいた。ミクロネシア短大チューク分校を訪れ、離島の大学の現状を学んだ。トノアス島では第二次世界大戦時の遺跡を巡り、チューク環礁と日本の関係の深さを学んだ。ピス島では伝統的な食事(パンノキ、芋類、バナナ、ココヤシ、魚介類)を島人と共食するとともに、実際に魚介類の捕獲・採集を体験した。電気・ガス・水道のない小さな島で、半自給的生活を経験し、現代人が忘れかけている「生きるとは何か」について再考・熟考する機会を得た。人が「豊かな」暮らしを持続的に実現するために必要な、自然生態的基盤、政治経済的基盤、社会文化的基盤について理解を深めた。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>グアム大学のYukiko先生から、御自身の講義に鹿大の学生が体験参加されてはどうか、とご提案をいただいた。学生交流・英語能力向上の観点から、前向きに検討すべき事項だと思われ、来年度の日程に加えてみたい。また、チューク環礁ウェノ島では、韓国の水産試験場を訪問して養殖について学ぶ予定だったが、葬礼のために訪問することができなかった。また台風の影響で海が時化たため、研修日程が少し前後した。ある程度柔軟に対応できる予定を来年度も組む必要がある。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属: 農学研究科修士1年

氏名: 古澤 慧

授業科目名	「太平洋島嶼学特論」
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成25年9月16日 ~ 9月23日
<p>〔研修を通じて得た成果〕ミクロネシア連邦、チューク州、ピス島において現地の住民の生活を体験してみ、インフラストラクチャー、食料の安定供給の重要性を痛感した。現地では、ガス、電気は供給されておらず、それぞれの家庭でガスボンベ、ジェネレーターで賄っており、水道は、地下水を汲み上げたものを供給するか、それぞれの家庭の井戸水のみで、飲用ではない。また、食料も、ココヤシ、パンノキ、パパイヤや、海で獲った魚介類が主である。米、即席ラーメンなどはマーケットに売られているが、購入するためには海産物を売り、収入を得る必要がある。このような状況では、安定した生活を営むのは難しく、現地の子供達も家庭の手伝いが求められるので十分な教育を受けられない。このような現状を知ったことで我々が世界、社会に求められることや、今後、社会に貢献するために今行うべきことを知ることができた。また、グアム大学でイノウエ スミス ユキコ先生と議論したことで、離島の教育の現状、問題点や男女共同参画社会のために何が必要か、国際社会における日本の文化の問題点などを考える良い機会になった。以前日本は父系文化であったので、そのような風習があった社会に、新しく男女平等の文化が入っても浸透するまでには時間がかかる。現在はその過渡期としてさまざまな策が実行されているが、男女共同参画社会が実現したかという定かではない。また、これからの国際社会の中で、日本が主張すべきことや、行うべき行動をしっかりと認識し、堂々と実行できる能力が求められてくる。今後の国際社会で通用するために、イノウエ先生がご推薦なさった「甘えの構造」という本を読みたいと思った。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕これから行動を起こす際に、国際社会の中での自分の役割や、求められていることなどをしっかりと認識し、考えながら行動することを心がけたい。また、より良い男女共同参画社会が実現するように、男性の立場から女性の意見、考えを尊重しながら行動できるようになりたい。さらに、現在の日本での生活が世界では希であることを理解し、その中での日本の「行き過ぎた近代化」を考え、余分なものを自制することで環境にも、私自身にも不可のかからない生活を送れるようになりたい。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属: 教育学研究科・2年

氏名: 小瀬 直人

授業科目名	「太平洋島嶼学特論」
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成25年9月16日 ~ 9月23日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>私は、今回初めて海外に行くこともあり、経験することの全てが新しく、そして学びを得るものとなった。まずグアムにおいては、歴史資料館やチャモロヴィレッジ、グアム大学に行くことができた。その中でも、チャモロヴィレッジでは、塩の作っている様子を見学したり、植物の葉の利用の仕方を学んだりすることができた。また、昔の建物を見学することもでき、当時のローカルな生活や文化を学ぶことができた。グアム大学では、グアム大学で働いている教授の方とコンタクトを取ることができ、グアムにおける教育の現状や海外から見た日本の現状、グアムと日本の社会の違いなどについて学ぶことができた。ミクロネシア連邦においてはまずメインの島となるWeno島に訪れた。空港からホテルまでの道は、島内のメインロードのはずだが、道は非常に凹凸があり、舗装をしている場面も見られたが、全く進んでない様子がうかがえた。また、空港から私たちが宿泊したホテルまでの道沿いには大小様々な商店やスーパーが点在していたが、そこ以外はほとんど店はなく、草が生い茂っていたり、道沿いには多くのごみが散乱している地域もあり、郊外の地域が荒廃している現状を目の当たりにした。また、チューク州では、日本の統治下に置かれていたこともあり、そのまま残ってる日本語を聞いたり、戦争の傷跡として沈んだ船が多くある地域もあった。Weno島から船で1時間ほど行ったところにあるPiis島にてその生活に触れた。この島には店というものはなく、Weno島で買って来た最低限のものと、あとはヤシの実やパンの実、とれた農作物や海産物をもとに自給自足の生活をしてきた。水に関しても井戸水と雨水を利用しており、天候に左右される貴重な資源であった。ある程度教養のある子どもからはチューク語のみでなく英語を学習しているので、英語による会話ができた。島を訪れた日は金曜日であったが、先生により休校であり、教育の疎かになっている現状を知った。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今回初めて海外に行くことにより、まず日本人に必要な力は英語力を磨くということだと痛感した。どの国でも第二言語で英語を学習しているが、日本はそれがうまく活用できないので、実践的な力をつけていく必要があると実感した。また、実際に今までの生活とはかけ離れた、あらゆるものがない中での生活することで、今の日本が便利になりすぎており、もの大切さや必要性などを感じる力の欠如が起こっていると考えた。そのため、今後教員を目指すものとして、今の生活があるありがたみや素晴らしさを伝えていきたいと考えた。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属: 保健学研究科博士前期課程2年

氏名: 谷口 光代

授業科目名	「太平洋島嶼学特論」
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成25年9月16日 ~ 9月23日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回、太平洋島嶼学特論の海外研修として、グアム、ミクロネシア連邦を訪れた。異文化や歴史を現地の方のお話や実際目で見て肌で感じ、また海外研修でしかできない貴重な体験ができた。</p> <p>様々な国に統治されたグアムや、日本が約30年ほど統治したミクロネシアの歴史やからも、人間関係や国との関係にも今もなお影響を及ぼしていると考えます。ミクロネシアの海域には数多くの船や飛行機が沈んでおり、第二次世界大戦時の戦跡などを見ると、なんだか胸が苦しくなる思いだった。日本からみた世界の歴史だけではなく、今回、グアム・ミクロネシアから日本を客観的に見る事ができた。歴史は消すことはできないため、同じ過ちを起ささないためにも、日本人としてどうあるべきか、どのように考えていかなければと感じた。グアムのイメージであるリゾートは、グアムのほんの一部であり、グアムの素顔に出会える南部ドライブと表現されているように、グアムの南部を一周することで、私のイメージするリゾートのグアムとは違った一面を知ることができた。</p> <p>グアム大学では、井上教授の講義とディスカッションできる貴重な時間をいただいた。井上教授の講義は、一つ一つの内容が深く、時間があれば一つ一つをもっとお聞きしたいぐらい、本当に興味深いものだった。その中でここでは2つ述べたいと思う。一つは、『日本人の謙虚は美德ではない』という言葉だった。黙っているのは日本人の悪さで、ミーティングの時に黙っていると何も考えてないとみられるとのことだった。私自身も海外に出てこのことは痛感した。「自分の意見を自分の言葉で述べること」は、簡単なようで非常に難しいことである。日本人はミーティングの場でなぜ黙っていることが多いのだろうか。これは日本の教育が大きく影響している1つではないかと考える。看護の仕事でも患者を対象とした健康教室、学生を対象とした教育指導など指導の役割は大きい。今は「参加型」といって参加者が積極的に参加する教室や研修等が増え、従来の一方向に話をするやり方とは変わってきている。これは義務教育をはじめとする教育現場でも同じようなことが言えるのではないだろうか。私自身が学生だったときのことを振り返ると、やはり一方向が多くディスカッションする時間はほとんどなかったように思う。そのような環境や教育で、自分の意見を言うことは容易いことではない。やはり訓練が必要であり、グアム大学では、講義のあとに必ずディスカッションする時間を設けているとのことだった。日本の教育の現場にも積極的に取り入れていく必要があると思う。そして、教育や指導する立場の人の姿勢として、「ファシリテーター」の姿勢や役割</p>	

を持つことも重要なことではないかと考える。私自身ももう一度自分自身を振り返り、色々な場面で自分がどう考えているのか、そしてそれを自分の意見として発言できるようにしていきたいとあらためて感じた。

もう一つは、グアムは母系社会であり、男性も子育てに参加するという事だった。日本では女性が社会進出する時代となり、男性の積極的な子育てということで、男性の育児休業取得を促進する動きがおこり、「イクメン」という言葉も聞かれるようになった。しかし、現実にはなかなか男性が積極的に子育てに参加できるような環境が整っていないため、男性の育児参加は厳しいのが現実である。そこには、環境や文化、ジェンダーなど様々なものが複雑に関係しており、現在の日本の少子化、女性進出、不妊、高齢出産など問題にとりあげられているものも、それらが大きく影響していると考えられる。母系社会で女性は社会進出でき、男性も子育てに参加しているというグアムの社会に、日本が今取り組んでいる問題解決へのヒントがたくさんあるのではないだろうか。これこそ、日本のシステムや社会の考えに固執せず、世界から見た日本、日本を世界と比較するなど視野を広げ、よりよい日本社会を考えていく重要性を感じるとともに、グアムやミクロネシアの母系社会についてももっと学習を深めたいと思った。

ウエノ島から船で約1時間離れたところのピス島に行った。日本との環境や生活様式の違いに戸惑いもあったが、現地の人の優しさにたくさん触れることができた。現地語が使われているため特に子どもたちとは言葉は通じない。しかし、子ども達と海で遊んだり、水浴びしたりとても楽しい時間を過ごすことができ、元気な子供たちの目の輝きに感動とパワーをもらった。言葉だけが意思疎通できる手段ではないことをあらためて感じる事ができた。また自然いっぱいのピス島、モノにあふれ不自由しない日本の生活についても考えさせられる時間となった。机上の学習では学べないことを8日間の海外研修では、実際目で見たり体験する中で数多くのことを学ぶことができた。このような機会を作ってくださった大学並びに関係者、そして、鹿児島大学学生海外研修支援事業として旅費の補助をしていただき、深く感謝している。

〔研修後の抱負〕

- ・実際にグアムやミクロネシアの史跡や第二次世界大戦時の戦跡の見学をし、歴史や文化を肌で感じ、学ぶことができた。研修に行く前にも事前学習はしていたが、グアム、ミクロネシアだけでなく、今後は更に太平洋島嶼の歴史や文化についても学習を深めていきたい。
- ・グアム、ミクロネシアともに使用されている言語は英語であった。ピス島では現地の人とのコミュニケーションをとる機会が多かったが、言いたいことを思うように伝えられず、理解できないところも多くもどかしい思いをした。英語を学ぶことによって、話せるようになるだけでなくその先に学べるが増えることも実感した。視野を広げ国際的な学びを深めるためにも、もっと英語を勉強し、言葉でしっかり意思の疎通を図れるように頑張りたい。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属: 農学研究科・M2

氏名: 島田 温史

授業科目名	「太平洋島嶼学特論」
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成25年9月16日 ~ 9月23日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>グアム大学での教育に関する講義では、グアムや周辺諸国(ミクロネシア連邦など)と日本における教育問題の違いについて大変有意義なことを学んだ。ミクロネシア地域の教育の問題点として以下の3点があげられる。①大学では教員の定年が無いことによる教員の高齢化と指導のマンネリ化、②小中学校に関しては、教員になるための免許や試験がないこと、そしてその他に就職先のない人が教員になることによる教育の質の低下、③他の州で教員になることのできることによる教員不足。また、グアム大学では先住民であるチャモロ人の教員の割合が多く、重役にチャモロ人が多く選ばれるため、チャモロ人以外の人々が差別を受けることがある。日本の教育との違いとしては、①授業料が高校まで無料である、②日本では使用する教科書を国が決められているが、グアムではカリフォルニア州の教育課程を採用し、各学校が教科書を自由に選んでよい、③授業では講義後にディスカッションやプレゼンをさせることが多く、日本のように教員からの単方向ではなく教員と学生との双方向の授業になっている、などがあげられる。</p> <p>ミクロネシア連邦(チューク州)での研修ではミクロネシアで抱えている問題、生活、日本との関係などについて学ぶことができた。抱えている問題としては大きく分けると二つある。まず一つは、HIVなどの感染症の問題である。チューク州ではHIV、AIDs、STIなどの患者が多く存在する。保健局や病院、CWCと呼ばれる女性団体などが協力し合い検査、予防やさまざまな検診を行っているが、援助交際や商売、宗教上の問題などにより中々解決には至っていなかった。もう一つの問題がゴミの問題である。ゴミ問題は島特有の問題であり、実際現地を見て回ったときゴミが至る所に見られた。対策としてゴミ収集車や高床式のゴミ入れの設置、日本の技術によるゴミ処理、埋め立てなどを行っている。生活としてはスーパーで売られているもののほとんどが輸入物で特に缶詰が多く料理にもよく使われている。また90%以上の人々がキリスト教であるためミーティングの前にお祈りを行う習慣がある。日本との関係として大戦時日本が統治していたため、チュークの人々は日本人との混血が多く、名前にアイザワやヤマモトといった日本特有の名前が残っている。またチューク語中には日本語が多く残っている。ウエノ島、トノアス島といった日本軍の拠点となった島々は春島、夏島などと呼ばれていた。トノアス島では日本統治時代、日本人が島民の80%いたため統治時代の建物などが多く残っていた。</p> <p>ピス島では現地の生活を体験学習することができた。ピス島には風呂、シャワーは無く井戸水を汲んで水浴びをするのみで、電気もガソリンで動くジェネレーターがあるだけであった。そのためジェネレーターが切れてしまった場合、暗闇の中行動せざるを得なくなる。主食としては米、パンノキが主体である。スープの代わりにラーメンが食べられている。おかずとしては魚介類が主体で揚げ物が多い傾向にあった。また、多くの料理にココナツを使用している。植生はウエノ、トノアス島と同様にパンノキ、バナナ、ココヤシは島の至る所で見られた。マンゴーやレンブ、カンキツ類も見られた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>この研修を通して他の国の教育の現状、南国の生活や植生、電気・ガス・水道のない島での生活など普段日本にいてだけでは絶対に体験すること、学ぶことができないことを経験することができた。特に私は果樹を研究しているので今後機会があれば遺伝資源の調査などを行いたいと思う。また、ピス島では島の人達と触れ合うことにより島の人々の温かさなどを肌で感じるすることができた。さらに電気がないところでの生活を通して日本の過ごしやすさを再確認することができた。今後はこの研修を通して経験し得たことを生かし実りある生活を過ごしていきたいと思う。</p>	